

井出浩先生との思い出

2015年度人間福祉研究科博士課程前期課程修了生 服部紀代

1. はじめに

私は2013年4月～2015年3月の2年間、人間福祉研究科博士課程前期課程に在籍し、井出先生をはじめ多くの先生方に支えていただきました。修了後も励ましのお言葉やご助言をいただき、現在も大きな支えとなっております。いつまでも支えてもらうばかりの私にこのような大変貴重な機会をいただきありがとうございます。今回は井出先生との出会いから現在までのさまざまな思い出を振り返りたいと思います。

2. 井出先生との出会い

井出先生に初めてお目にかかったのは2011年夏の研究室訪問でした。当時私は東京の私立学校で養護教諭6年目として勤務し、私立学校の厳しい現状を目の当たりにしていました。当時の私立学校は、さまざまな学習レベルの生徒やメンタルヘルス問題を抱える生徒が入学するようになり、生徒の不適應の問題が増加傾向にありました。公立学校はSC・SSWの派遣、小規模学級制、保健室の健康相談活動の充実、教職員の研修等、さまざまな対策を講じていましたが、私立学校は具体的な対策が提案されておらず、各学校が独自の対応をしている状況でした。私の勤務校も同様で、メンタルヘルス支援体制が十分ではなく、子ども、保護者、教職員が疲弊しており、日々悶々としていました。そのような日々の中、井出先生と親交の深い植本雅治先生（神戸市看護大学名誉教授）と私の大学時代の恩師の鶴川晃先生（大正大学准教授）と仕事後に渋谷で美味しいお酒をいただく機会がありました。その際、私の職場や私立学校の現状を話すと、「そんなに悩んでいるならひとまず大学院に行こう！」という話になり、お二人はその場で相談し始め、「井出先生だ！」とお名前が挙がった時にはもうすでに植本先生が井出先生に連絡をとっていました。最初は不在で、数分後、井出先生から植本先生に連絡が入り、「なあ、井出君のところは来年も修士の院生をとるの？」と尋ね、お返事があったかは分かりませんが、「そこに行かせたい子がいるから連絡させてもいいか？」と伝え、「それじゃ、よろしく。」というやり取りで終わりました。ほんの数分のやり取りでした。その後、私から井出先生に連絡させていただき、初めての研究室訪問に至ります。今思えばコントのようなやり取りで、私がどんな人間かも知らないまま、井出先生はお引き受けくださったのだと思うと、本当に申し訳なく思います。

初めての研究室訪問の日、大学のホームページで見ていた「お髭のある優しそうなおじさま」が迎えてくださいました。私の曖昧な研究計画を、私が自分の言葉で表現できるように時間を取りながら面談をしてくださいました。私は私立学校の教員へのインタビュー調査でまとめようと考えていたのですが、私立学校の状況を調査し、実態を把握することが必要ではないかと井出先生にご指摘を受けました。それに対し、確かにそうだなとは思いましたが、自分にそこまでできるかと非常に不安になり、大学院の入学や研究をするということは本当に大変なことだと感じ、挫けそうになったのを覚えています。その表情を察していただいたのかもしれませんが、「修士の2年はあつという間だから、もう一年かけて研究計画の練り直しと準備をしてから受験したらどうか。」とご提案いただいたことで、その時の不安な気持ちや緊張が少し和らぎました。また当時の私の職場は、私が養護教諭のとりまとめをしていたので、退職に伴い、養護教諭の補充採用と現任者への引継ぎや、立ち上げたメンタルヘルス支援体制を誰もが担当可能な形にまとめおく必要があると感じていました。これらの状況から、私は翌年2012年に大学院を受験すること

にしました。入学までの間、研究計画のご指導に加え、当時の私の職場のメンタルヘルスの問題に対する的確なご助言をくださり、メンタルヘルス支援体制がさらに充実したことをこの場を借りて御礼申し上げます。

3. 大学院での2年間

(1) 井出先生の研究指導

大学院入学後は毎週のゼミでのご指導いただきました。1年目は修士2回生の國宗さんと3人で行われ、前期は國宗さんの研究内容をディスカッションした後、私のぐだぐだした研究計画を整理する作業が続き、私の修士論文のテーマは「私立中高一貫校のメンタルヘルス支援体制構築の課題」でした。井出先生は入学前から、「研究はものすごく絞られた事柄を追求することになる。これだけのことを述べるのにこんなに多くのプロセスが必要なのかと思うくらいだから、テーマを明確にしなければならないよ。」とおっしゃっていました。前期は「研究の着地点をどこに持っていくのか。」「リサーチクエスションは何か。」「と毎週問いかけられました。私の前期の課題はその問いに答えることでした。しかし、頑固な私はテーマを変更する気は全くなかったため、毎週問いの答えが出ず、同じやり取りを繰り返していました。井出先生はそんな私の堂々巡りに、時々困った表情を浮かべながらも辛抱強く付き合ってくださいました。きっと「何て頑固な学生なのだ。」と思っていたのではないかと思います。さらに11月の半ばには、学校対象のアンケート調査ならば、冬季休業中の方が教員の時間があるから回答率が上がるかもしれないと思い立ち、「井出先生、アンケート調査を12月中に送ります！」と急に私が動き出した時、井出先生は「ああ、そう。」と返答されました。その際もきっと「ああ動き出したな。」と思い、静かに見守ってくださったのだと思います。私はコツコツと慎重に計画を立てるという性格ではなく、「思い立ったが吉日、さあやろう！」と自分でスイッチを入れないと動き始められない性格なので、井出先生はそんな私にタイミングを図りながらご助言くださっていたのでしょう。本当に面倒な学生だったと思います。

また私たち二人が研究で悶々としていると、「今日は天気も良いしコーヒーでもどうかな。」と提案していただき、三人でお茶しながら他愛もない話をしつつも、最後には研究のディスカッションにつながるなど、毎週のゼミはのんびりとゆったりとした雰囲気でもありました。

2年目は毎週マンツーマンでのご指導をいただきました。私はとにかく取り掛かりが遅いので、井出先生はのんびりした雰囲気を保ちつつも、1年目とは異なり、監視の目を光らせ、思い出したように「そろそろやり始めましょう。」「そろそろここまでできているのかな。」と私に声かけをされました。その声かけは口頭試問の合格後の最終提出まで続き、現在も時折声掛けしていただきます。2年目は、前期に教員を対象にしたインタビュー調査を行い、夏季休業にはいよいよアンケート調査結果と合わせ、考察を始めることになりました。ですが私の筆は全く進まず、アンケート調査の統計を何度もやり直したり、インタビュー調査の内容をだらだらとまとめだしたりと、再び、私の堂々巡りが始まっていました。アンケート調査結果やインタビュー調査内容から、私立学校は公立学校と同様に、さまざまな問題を抱えた生徒が存在し、各学校はその対応に苦慮していること、各学校独自にメンタルヘルス支援を模索し、現存する資源（教職員、養護教諭、SC等）による支援を行っているという実態が明らかになりました。この結果を見て、「こんなの当たり前の結果ですけどね。みんな分かっていたことじゃないですか…。」と落ち込んだ私に、井出先生は「確かにそうだけど、当たり前なことを実証するのも研究ですよ。」とグサッと刺しながらもフォローをいれてくださいました。「結果だけを見るのではなく、あなたはこの結果からどんな対策を考え、どんなことを社会に提言したいのだろうか。それを考えることが重要なんじゃないかな。」とご助言くださいました。結局私は、井出先生からの問いかけを12月まで考え続け、ようやく私なりの答えが浮かび、次のようにまとめました。「①各学校が現状を把握し、学校メンタルヘルス上の問題の支援に関する校内の意識を共有すること、②校内の資源（教職員、専門職、校務分掌など）が各々の役割を見直

し、現存する資源での対応を熟考することの2点を検討することで、各学校なりの実効性のある学校メンタルヘルス支援やその在り方が見える。さらに今後も問題を抱える子どもの増加が予想され、現場教員の負担増は否めないため、子どものより良い学校生活への支援と教員のメンタルヘルス対策の両面が必要で、校内体制の構築はその両方に大きな価値を見出すと考える。」今読んでも「そうそう当たり前のこと。」だと思いますが、一方で「でもその当たり前が私の教育実践の基盤になっている。」とも思います。研究としてはまとめきれない内容でしたが、私にとっては非常に意味のあるものになったと今は実感しています。

口頭試問で井出先生は静かに私の発表を聴いてくださいました。「大変杜撰な論文だと思います。」が井出先生の最初のお言葉でした。私もその通りだと感じていましたので、井出先生との2年間を振り返り、井出先生にその言葉を言わせてしまったことを猛省しました。しかし同時に、「いつかまたこのテーマを継続した研究がしたい！」と強く思った時間だったと今でもはっきり覚えています。井出先生との2年間は、私の生き方に大きな変化をもたらし、また自分なりの成長を感じる時間になりました。

(2) 井出先生と神戸市の養護教諭とのつながり

大学院入学前から神戸市の養護教諭の先生方とのつながりが少しずつできていましたが、井出先生の研究室に入ったことで、「あの井出先生に指導してもらっているの？すごい！」と声をかけていただくことが増え、養護教諭の先生方とより深くつながることができました。神戸市の養護教諭の先生方は、長期にわたりさまざまな研究会や研修会を企画されて、現在も精力的な保健教育活動をされています。その活動に大きな影響を与えた人物の一人として井出先生は欠かすことのできない存在だと、当時、神戸市の養護教諭であった細川愛美先生（現、兵庫大学講師）はお話されました。以下、細川先生に伺ったお話を紹介します。

神戸市では阪神大震災以前より、メンタルフレンド事業など子どものこころのケアに関するさまざまな活動が始まっていましたが、阪神大震災という未曾有の出来事が起こり、学校現場は何をしたらよいか、何からしたらよいか、その場に立ち尽くしてしまうような状況にありました。当時、井出先生は神戸市児童相談所（現、神戸市こども家庭センター）に所属されていました。震災により、子どもや保護者が児童相談所に来所できない、施設にいる子どもの状況が把握できないという状況があり、井出先生が自ら学校に足を運び、学校、家庭、地域の状況を把握したり、教員の話の聞いたりしながら、教員と一緒に子どものこころの支援を行っていました。神戸市は西側では植本雅治先生と高宮静男先生（現、たかみやこころのクリニック院長）、東側では井出先生が中心となり、子どものこころの支援を行っていました。他にも多くの医師や専門職の方が支援にあたっていました。時間の経過とともに状況が見えてくると、さまざまな事例が生じ、その対応に躓くたびに井出先生がご助言をくださいました。さらに支援が進むにつれて、隣の学校で同じような事例が生じていて困っている状況が見えてきたことで、対応例を共有できれば支援のヒントになると思い、養護教諭らが中心になり、事例検討会を企画し、学校内で共有して支援につなげる形ができました。

このような専門家派遣による子どもの支援は2年ほど続いたそうです。これらの活動が現在の神戸市の養護教諭の活動にもつながっていると細川先生はお話されていました。こうした活動の中で、細川先生は井出先生にいただいた心に残る多くの言葉やエピソードがあるとお話されました。「思春期は疾風怒濤の時期だから、一緒に揺らいであげよう」「甘やかすと甘えるは違う」など、子どもがこころに不安を抱え、揺らいでいる姿に気づいた時に、その子のエネルギーが不足しているのだから、その子を抱きしめてあげようという、子どもへの温かいまなざしを教えていただいたということです。

また井出先生は、著書「災害と子どものこころ」で「災害に遭遇した子どもに親はどう接するのか、どう見守るのか」について書かれています。井出先生がいつも語られる E. H. エリクソンの話を用い、災害に遭った子どもたちはその安心安全な環境を揺さぶられた状況にあるため、子どもたちが守られていると

いう感覚を持ち、基本的信頼を回復することが必要で、それには「当たり前前のことを、少しでも丁寧にして、見守る」ことが重要であるが、これは「子どもが健康に育つために平生から求められていて、災害後の支援の場だけに必要な、特殊なことがらではない」と述べられていました。

今回の細川先生のお話や井出先生の著書のお言葉を通して、子どもの支援において「子どもの状態をしっかり見る」ことで、子どもが表現できない何かを丁寧に感じ取り、焦らずゆっくり無理せず引き出すことから、井出先生がおっしゃるような温かいまなごしの支援が始まるのではないかと思います。自分はできているのだろうか、非常に深く考えさせられる機会になりました。

4. 私が学校現場に復帰してからの井出先生とのつながり

私は修士終了後、再び学校現場に戻ることにしました。自身の研究内容がどこまで合致しているのか、合致しないのか、現場はどう変化しているか、また現場が真に求めていることは何かという問いを持って戻りました。今思えば、次に考えたいことがすでに浮かんでいたのかもしれませんが。私は、復帰後の教育実践の中で、研究結果のように学校全体での共有が不可欠だと感じましたが、同時にその困難さも痛感しました。「何かできることはないか。」と復帰後もまた悶々とし始め、その気持ちを時折、井出先生に連絡していました。すると井出先生は「たまには顔をみせてください。」といつもお返事をくださるのです。その言葉で私の沸騰した気持ちがクールダウンされていました。

また現場復帰後2年目になり、少し他のことを考える余裕が出てきたので、修士論文を日本児童青年精神医学会で発表してみようとまた急に思い立ちました。学会が近づくにつれ、緊張が増しましたが、井出先生が共同発表としてくださったので、同席していただけると安心していました。すると井出先生よりメールが入り、「思っていたことが的中しました。あなたの発表の裏で司会をしなければならなくなりました。ごめんなさい。」と、そして最後に「あなたならできる！」と書かれていました。「先生～！ひどい！」と泣きそうでしたが、井出先生は私の発表の司会の先生にフォローを依頼したり、発表前夜には緊張している私を食事に誘ったりと、温かい支援をしてくださいました。無事終えて、井出先生に報告に行くと、「ね、大丈夫だったでしょう。ちゃんとやれていたと思うよ。」と言ってくださいました。

修士の2年間もですが、井出先生は「全面的に支援するよ！」という熱い印象ではなく、時々「本当に聞いてくれているのかな？」と思うくらい一定の距離感を保っているのに、毎回学生が欲している言葉をかけてくださいます。それが私にとっては今でも大きな支えになっています。本当にいつもありがとうございます。

5. 私の今後について

現在も引き続き、学校現場にはさまざまな問題が山積し、それらの問題は深刻さを増しています。そのため、学校での問題対応は「チーム学校」と呼ばれるチームでの対応を求められ、事象によっては専門的な支援が必要となり、校内外の連携も求められています。しかし、学校で校内外の適切な連携が図れず、より深刻な事態に発展している現状もあります。子どもの健やかな育ちを支援するためには校内外の連携に関する対策の検討が急務だと私は考え、現在、博士課程を目指しています。投稿論文や海外論文の研究等の受験準備の段階で頭が全く追いついていないのでチャレンジの途中です。何度も挫けそうになりますし、何度も止めようと思うことがあります。しかし、井出先生が私と一緒に堂々巡りしてくださった2年間があるから、私はまた研究したい、追求したいと思うのだと思います。

6. おわりに

井出先生は私が院生の時から、「ゆっくりしたいなあ。」「やりたいことをゆっくりやりたいなあ。」とおっしゃっていました。私は井出先生がやりたいことが何なのか今も分かりません。そして、ゆっくりしたいとおっしゃっていますが、きっとゆっくりできないだろうと思っています。各方面からの数多のご依頼が順番を待っていると思います。

最後になりましたが、井出先生、どうぞご自愛ください。そして今後も私たち学生を静かに温かく見守っててください。

〈参考文献〉

柳田邦男・井出浩・田中究・清水將之「災害と子どものころ」2012, 集英社新書